能満の歴史探訪

その2

能満地域にある史跡を知っていますか？

県指定重要文化財　府中日吉神社

ふるれんネット・いちまる館でダウンロードできます

上総の国いちはらの歴史を知る会

（ふるさと市原をつなぐ連絡会会員）

旧称：能満の史跡を知る会

平成 28 年 9 月 編集・製作

千葉県指定重要文化財　府中日吉神社

府中日吉神社の沿革と歴史

市原市は、千葉県のほぼ中央部に位置し、北を村田川、西を東京湾、南を清澄山に連なる山並みに囲まれた地域にあり、中央部を南から北に流れる養老川は、古くから生産基盤に恵まれた土壌を養成して、古墳時代には上海上国造、菊間国造、奈良時代には国府・国分寺が設置されるなど、古代国家における地方の中核として栄えてきたところです。古代東海道は、相模の国より東京湾を渡り上総の国に上陸し、海上・市原郡を通って下総の国に至ったと記されている。「延喜式」記載の上総国府は市原郡とありますが、現在、市原説、能満説、村上・惣社説など複数の想定値があるが、まだ特定はされていない。しかし、能満という地名は、マオリ語で「ノホ・マナ」NOHO－MANA と呼ばれていたようで、「ノホ・マナ」とは「権力機構が駐在している土地」という意味で、当時能満に国府があったのではないかと思われる。上総国で「府中」という語が最初に登場するのは、応永九年（１４０２年）銘のある懸仏で「上総国府中国庁」とあり、この頃には府中という地域に国庁が所在していたことが分かる。このことは、応安七年（１３７２年）の「上総国市原八幡国役庄役註進状」（三宝院文書）等にも見え、上総国の国衛機構がきわめて詳細に示されている。現在、府中なる小字名は残されていないが、府中日吉神社に残されている棟札には「能満村府中」と書かれた物があり、中世国衛機構崩壊後、天正十八年から江戸初期の間に府中から能満に地名が改められ、中世における国衛の中核のみが「府中」と伝承されてきたと思われる。また、府中日吉神社は、府中の社号を冠する神社で、中世における国衛機構との関連が説かれてきた。神社は、東京湾に流入する村田川水系に属し、能満川及び下谷によって形成された舌状台地の基部に位置にある。この三方を谷によって囲まれた地形内に、単郭形式の平山城に属する能満城があり、主郭部には、「城山」という小字名が、東側に水堀を伴う館跡想定地の一帯を「城下」という小字名が残っている。

府中日吉神社本殿（県指定重要文化財）

この能満城（府中城と呼ばれていた時もあった）は、一説には「里見義堯」の家臣の忍民部少輔の居城であったともいわれており、西方５００ｍには本城の市原城が、北側には「白船城」があり、攻め来る敵兵からの防衛体制を固めていたと思われる。能満城跡地から、南北朝から室町時代に同定された五輪塔、宝篋印塔（ほうきょういんとう）を多数出土されている。このことから、室町時代まで遡ることが出来る。府中日吉神社は、能満城の二の堀の南に位置し、能満城の一郭として存在した。

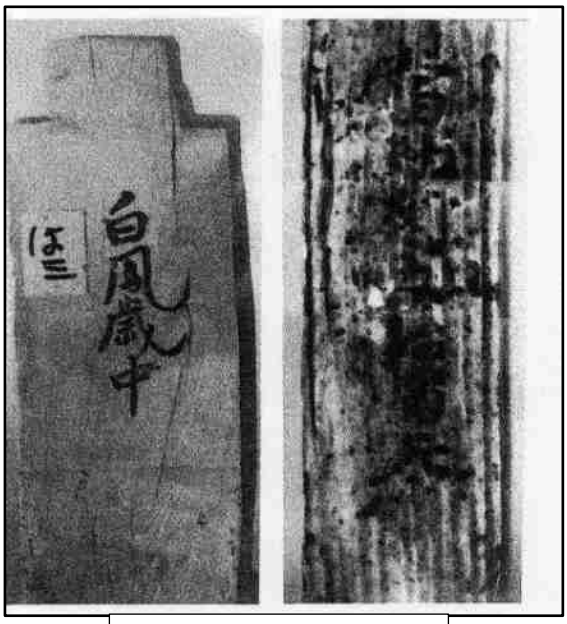
釈蔵院側から見た能満城址

府中日吉神社の創建年代は明らかではないが、江戸時代の棟札には「天武天皇白鳳二癸酉歳創建云々」（西暦６７３年）に創建されたと記されており、また、社殿が室町時代後期の建設あることから見ても、非常に古くからこの地で奉祀されてきた神社です。社名は、江戸時代には「山王権現」あるいは「日吉山王権現」と呼ばれていたが、明治十

二年に「神社明細帳」（神社の戸籍簿的なもの）には、「日枝神社」として登録をされていた。その後明治二十七年三月に「府中日吉神社」に名称を変更されている。それは、以前から「日吉山王権現」と呼ばれてきたことや「能満村府中」に存する神社であるので「府中日吉神社」と名称を改めたと思われる。そのことから分かるように、比叡山延暦寺の守護神である「日吉大社」の祭神の「大山咋神（おおやまくいのかみ）、大己貴神（おおなむらのかみ）その他」を勧請した神社です。府中日吉神社の現在の祭神は「大国主命（おおくにぬしみこと）」とされている。大国主命は、大己貴命の別名であり、明治以前の日吉信仰では大己貴神が主神とされていたことに基づくものです。

また、神社の所在地は、上総国府の有力推定地である市原市村上及び惣社地区のちょうど東北方に位置しており、京都に対する比叡山及び日吉大社の位置と同じであり、このことからこの神社が上総国府の守護神として勧請された可能性がある。

現在の社名の「府中日吉神社」が用いられるようになったのは、明治２７年からでありますが、これは神社の所在地が江戸時代から「能満村府中」と呼ばれていたことで、「府中」という地名に関しては、神社の所在地を含む地域に、南北朝時代から室町時代にわたって規模の大きな城郭が存在したことと考え合わせてみると、ここに古代から中世にかけてのある時期に、上総国の国庁があったと考えられるがその遺構などの確認は出来ていない。



正徳の改修を記した棟札

江戸時代に建てられた拝殿と水鉢

府中日吉神社の建築様式は、現在は広い境内の中に本殿とその前方に接続する拝幣殿のみが古い建物として残っている。拝幣殿は凸字型の平面を持つ建物で、以前は突き出た幣殿の屋根が本殿の屋根下に入り込む形で接続されていて、全体が工字型平面を構成し、いわゆる権現造りの形式でした。この拝幣殿は、正徳４年（１７１４年）の解体修理された時に合わせて新築されており

質素な造りの手ばさみ

その後の文化５年（１８０８年）に造り替えたものであると記されている。しかしながら、本殿に幣拝殿を接続したために、本殿の正面からの美観が著しく損なわれてしまったのと、本殿と幣殿の屋根のつなぎ目から雨水がしみ込んでしまい、本殿正面の部材を痛めてしまっていたので昭和６１年の解体修理において本殿と幣殿を切り離し旧来の本殿の形に戻された。本殿は、神社本殿の形式分類では「三間社流造（さんげんしゃながれつくり）」で、「三間社」というのは、社殿正面の柱間が三つあるという意味で「流造」とは、屋根の形に基づいており、屋根の一方の軒先を伸ばして庇（ひさし）をつくり、それを横から見たときに緩やかな曲線形をしているところから流造りと呼ばれている。

本殿の形式について、その正面の庇の部分に高く床板を張り、その庇の周囲には戸は入れずに吹き放ちなっていることがある。このような本殿形式は「見世棚造」と呼ばれており、その外観が家の前の庇に棚を設けて素朴な商家に似ていることから名付けられたものと思われる。現在、見世棚造は、奈良や京都の町中に

ある小さな祠などに多くみられるが、普通の神社の本殿で使われているのは少ない。江戸時代や近代の流造の本殿では、庇の内部は床を張らず、土間にして、そこに縁と階段を設けるのが多い。

また、復元された府中日吉神社には左右の側面に縁がないことです。これは、これまであった縁が正徳年間に新しく付けられたものであることが判明したので、創建当時の縁のない形に復元をしたためです。このように、左右の縁やそれに伴う欄と脇障子のない本殿形式も、室町時代の神社本殿にしばしば用いられている。

本殿内に安置されている内宮

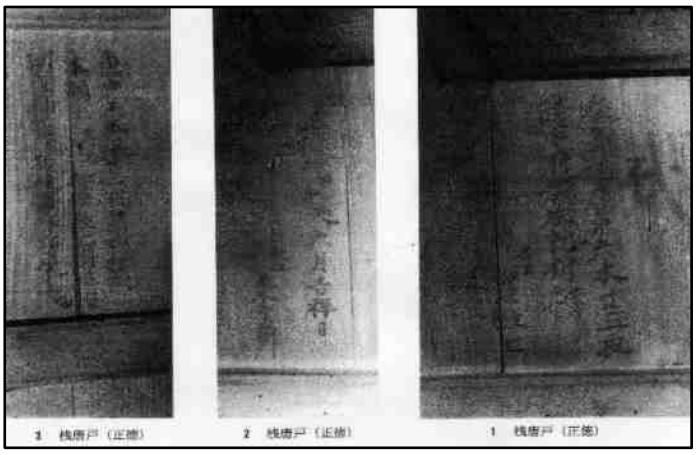
次に、建築以外の各部分の造りついてみると、江戸時代以降に建築された本殿建築に比べ、装飾が著しく少なく、江戸時代の神社で多く使われている唐獅子や竜などをかたどった彫刻のようなにぎやかな建築装飾は全くない。装飾らしいのは、庇の内部の軒裏にある手ばさみとよばれる表面に渦を彫った厚板状の部材だけでした。

その他には、正面の庇の軒に使われている垂木が江戸時代の解体修理時に二軒（ふたのき）形式でしたが、創建当時は一軒（ひとのき）に復元して組み立ててあります。

※　二軒とは、内側の垂木を地垂木、外側の垂木を飛檐垂木（ひえんたるき）で二段となって前方に突き出している形式で、飛檐垂木のないものを一軒という。

しかし、「この本殿がいつ建てられたか」というと正確に答えるのは難しいようで、これまでに府中日吉神社の室町時代の状況を報じられるような古文書や棟札などの資料が発見されていない。また、正徳四年の解体修理工事の年号を記した墨書は発見されたが、それ以前のものは発見されていない。

従って建設年代の決定は建築様式の特徴を手掛かりに推定する方法を取らざるを得ないが、昭和６１年の改修工事で正面の軒が一棟であったことが判明し、当時使われていた垂木も発見され、正徳四年の修理までにかなりの年月が経っていることが、柱の風化程度から分かり、建築年代は十五世紀末期ないし十六世紀初期ごろではないかと思われる。その根拠として、この建築に使われている部材には、大鋸（おが）とよばれる鋸で引いて、その上を釿（ちょうな）で仕上げた痕跡が残っているからです。大鋸は、室町時代に大陸から渡来し、十五世紀初めごろから徐々に全国に普及し始めた様で、それまではクサビを木目に沿って打ちこみ木材を割っていた。このような状況でから、１５世紀後期か１６世紀初期と判断できる。



解体修理で発見された墨書類

※　木材を鋸で切った木くずを「おがくず」と言われますが、十五世紀初期に渡来した大鋸で木を切った木くずを「おがくず」という様になったようです。　なお、千葉県内に残る室町時代に建てられた神社建築では、市原市内にある「飯香岡八幡宮」と夷隅郡大多喜町の六所神社本殿」の二棟があるが、二つの神社よりも古い造りでは、千葉県内の神社建築の中では最古の建物の一つということが言えます。

府中日吉神社本殿は、建立されてから五百年以上の月日が経過していて、その間に修理や改造工事が行われたが、これらの修理の中で一番大規模であったのが正徳４年（１７１４年）の修理で、この時には全面的に解体修理が行われている。それは、１１年前に起きた「元禄大地震」（１７０３年）で大きな被害を受けた為に行われたものと思われる。これを示す棟札にも「社殿大破」と記されたものが発見されている。

これを機会に本殿の外観も江戸時代の建築様式に合わせて改造された。また、礼拝の便宜を考慮して前方

に「拝幣殿」が加えられ、全体が権現造になった。その後に、屋根の葺き替えを延宝五年（１６７７年）明和二年（１７６５年）文久二年（１８６２年）に行ったことが棟札に記されているが、大正十一年には、それまでの茅葺屋根から現在の銅版葺き屋根に替えられた。

本殿の中には寛延三年（１７５０年）に造立された「山王権現本社内宮」が安置されています。内宮の造りは本殿の造りと同じ様で「三間社流造」で、装飾などはなく質素な物です。祠に収められている祭神は「大国主命」と言われている。

その他に境内に祭られている祠を紹介します。

本殿左側に「大杉大明神」と「富士浅間小社」「熊野大権現小社」が祭られています。

「大杉大明神」は、享保六年（１７２６年）に、「富士浅間小社」と「熊野大権現小社」は享保七年（１７２７年）に建てられたものです。また、本殿右側には、稲荷神社が祀られていますがこの祠は嘉永元年（１８４７年）に建てられた物です。

神社入り口正面には鳥居が建てられています。最初の建てられた鳥居は、享保六年（１７２１年）に「山王大権現鳥居」が造立された物で木造でした。その後に宝暦八年（１７５８年）に「日吉山王大権現鳥居」として造り替えられました。また、嘉永七年（１８５４年）に山王大権現の鳥居が再建され、昭和２１年（１９４６年）に改築されました。現在建てられている鳥居は、昭和４６年に建て替えられたもので、木造から鉄骨造りになりました。府中日吉神社の年表の中に鐘楼堂修理や再建との記載がありますが、江戸末期までは神仏集合で祭られており、府中日吉神社も「釈蔵院」の支配する神社でしたが、明治元年に発布された「神仏分離令」によりそれぞれを独立させた。現在、釈蔵院に鐘楼が移築されています。

※　「神仏分離令」とは、明治政府により「王政復古」「祭政一致の理想実現のために神道国教化の方針を採用し、それまで広く行われてきた神仏集合を禁止した。

神社入り口の鳥居をくぐり階段を昇ると左右に狛犬ならぬ狛猿が迎えてくれます。他の神社では見られないと思いますが、神社の名が日吉神社で、太閤日吉殿下のあだ名になぞえたものではなく、<u>惣社の国分寺の守護神として鬼門の方向に立っており、厄除けの干支の猿を使った物</u>です。ちなみに桃太郎の鬼退治のお供は、猿と犬と酉です。

府中日吉神社の祭礼は、毎年四月の二の申の日に行うのが習わしですが、近年は二の申に近い日曜日に開催をされています。

昭和の改修前の本殿（上）と改修後（下）

三社が収められている建物

昭和４６年に建て替えられた鳥居

参道左右に鎮座する狛猿

※　三社倉に祭られている小社の案内

大杉大明神　―　享保十一年（１７２６年）に大杉神社より分社をして祀れている
神社の創建は、神護景雲元年（７６７年）と伝えられている。
主祭神は倭大物主櫛甕玉命（やまとおおものぬしくしみかたまのみこと）
配祀として大己貴命（おおなむらのみこと）と少彦名命（すくなひこなのみこと）
神木は、境内にある大杉が社名の由来となっている。

富士浅間神社―　享保十二年（１７２７年）に富士浅間神社より分社をして祀られている。
神社の創建は、第７代孝霊天皇時代に富士山が大噴火をし、住民が離散をし荒れ果ててしまったので、第１１代垂仁天皇が垂仁三年（前２７年）に浅間大神を山足の地に祀り山麓を鎮められたのが起源とされている。
主祭神は、木花之佐久夜毘売命（このはなのくさやひめのみこと）別称浅間大神
相殿神として、瓊々杵尊（ににぎのもこと）と大山祗神（おおやまずみのかみ）
古くから、富士山信仰が庶民に普及しており、富士浅間神社の分社を地元の神社に祀り敬うところが多い。全国に１３００社以上で祀られている。

熊野権現　―　享保十二年（１７２７年）に熊野神社より分社して祀られている。
神社の創建は、天平神護二年（７６６年）に速玉神と熊野牟須美神にそれぞれ４戸の神封を施入したとある。これらを２柱の神は今日の新宮に比定される熊野神邑（くまのしんそん）に一緒に祀られている。
主祭神は、家都御子神（けつみこのかみ）・阿弥陀如来（あみだにょらい）・熊野速玉男神（くまのはやたまおのかみ）・熊野牟美神（くまのみすみのかみ）・千手観音とされる。熊野三山はそれぞれ、本宮や西方極楽浄土、新宮は東方浄瑠璃浄土、那智は南方補陀落浄土の地であると考えられ、平安時代以降には熊野全体が浄土の地であるとしてみなされるようになったようで、全国に三千社以上で祀られている。

境内に祀られる祠

稲荷社　―　稲荷神は、稲を象徴する穀霊神・農耕神で、稲荷大明神、お稲荷様、お稲荷さんともいう。
五穀をつかさどる御食津神・ウカノミタマと稲荷神が同一視されることから、総本宮の伏見稲荷大社を含め、多くの稲荷神社ではウカノミタマを主祭神としている。
本来は穀物・農業の神ですが、現在では商工業を含め産業全体の神とされ、日本で最も広範に進行されている神の一つです。稲荷神は、神仏習合思想において仏教の女神である「荼枳尼天」とも習合したため、仏教寺院でも祀られることもある。

疱神社　（石祠）疱神は、疱瘡神（天然痘）を擬神化した悪神で、疫病神の一種です。平安時代の「続日本紀」によれば、疱瘡は天平７年（７３５年）に朝鮮半島の新羅から伝わったとある。大宰府に左遷された菅原道真や藤原広嗣らの怨霊信仰とも関連図けられ、疱瘡は怨霊の祟りとも考えられた。地方によっては、疱瘡神を悪神とみなさず、疱瘡の事を人間

の悪い要素を体外に追い出す通過儀礼とし、疱瘡神はそれを助ける神とする信仰もある。近年では、種痘による疱瘡の予防が一般化した後も、地方によっては民間伝承における疱瘡神除けの習俗が継承されていた。

痘神社の石祠

仙元大菩薩の石祠

道祖神の石祠

阿波嶋大明神の石祠

金比羅大権現の石祠

道路建設の為移動された道祖神

中国道教の庚申塔

神社厄除けの狛申と石燈篭

文政７年に奉納された石燈篭

境内入口に建てられた石碑

昭和６２年の修復記念の石碑

日露戦勝記念碑

境内に奉納されている手水舎

拝殿に掲げられる扁額。
時代経過により文字が消える

太政官首記伊藤信平敬書の扁額

府中日吉神社の御祭神

大国主神について　「古事記や日本書紀」によると、須佐之男命の６世の孫、また「日本書紀」の別の一書には７世の孫などとされている。父は天之冬衣神（あめのふゆきぬのかみ）、母は刺国若比売（さきくにわかひめ）。また「日本書紀」正伝によると須戔嗚尊（すさのうのみこと）の息子。日本国を創った神と言われている。
別名大己貴命や大黒様とも言われる
神格は、国造りの神・農業の神・薬の神・禁厭の神

大山咋神について　古事記では、別名を「山末之大主神（やますえのおおぬしのかみ）と伝えられる。
名前の「咋・さく」は杭のことで、大山に杭を打つ神、すなわち大きな山の所有者の神であり、また、農耕（地水）を司る神とされる。
大山咋神は別名山王で、中国天台山の鎮守「地主山王元弼真君」に倣ったもので、比叡山には、本来、山の全域において大山咋神の他にも多数の神が祀られており、最澄が延暦寺の守護神として認識したのは、大山咋神だけでなく、その他の「諸山王」を含めた比叡山の神々全体のことであったとも指摘されている。

仙元大菩薩の石祠
（浅間）　仙元大菩薩は、木花咲耶姫命（このはなさくやひめのみこと）と申して、ニニギノ命の妃神で、富士山信仰の祭神です。
ニニギノ命と夫婦となり、一夜にして子を身ごもったので、ニニギノ命から「本当に俺の子か」と疑われたので、木花咲耶姫は我が身の潔白を証明するため産屋を立て、その中に籠ると産屋に火を放ち、その火の中で無事に御子神を出産して、夫に潔白を証明させたという言い伝えがあります。
この言い伝えから、安産守護の神様として仰されています。

道祖神の石祠　道祖神は、村里の入口で、外から襲う悪霊を防ぐ、境の神・道の神です。また後に、旅行安全・縁結び・子授け・安産の神として幅広く信仰され、子供と親しい神と言われる。近世、自然石・陰陽石・石塔などの形で、村境や辻、峠などに祀られている。

金比羅大権現　金毘羅権現は、香川県琴平町の象頭山に鎮座する山岳信仰と修験道が融合した神仏習合の神です。本地仏は不動明王、千手観音、十一面観音などの諸説がある。

祭神は、天竺（てんじく）からの飛翔仏であるが故、日本の神々とは無縁ですが、明治初年の神仏分離・廃仏毀釈が行われた以降は、大物主とされた。
神仏分離以前は、讃岐国象頭山松尾寺金光院（現在の金刀比毘羅宮）を総本山とする日本全国の金毘羅宮及び金毘羅権現社で祀られている。
また、海上交通の守り神として祀られている。

阿波嶋大明神　「あんば様」とも呼ばれ、千葉県から東北地方にかけて太平洋岸の漁村で信仰されている神。漁を休んで漁具を浜に集めてこの神を祀り、豊漁を祈る。
大杉大権現との関係がある。

庚申塔　庚申塔は庚申塚とも言い、中国より伝来した道教に由来する庚申信仰に基ずいて建てられた石塔のこと。
庚申講を３年１８回続けた記念に建立されることが多い。
塚の上に石塔を建てることから庚申塚、塔を建立に際して供養を伴った事から庚申供養塔とも呼ばれる。

庚申講（庚申待ち）とは、人間の体内にいるという三尸虫（さんしちゅう）という虫が庚申の日の夜、寝ている間に天帝にその人間の悪事を報告しに行くとされていることから、それを避けるためとして庚申の日の夜は夜通し眠ら無いで天帝や猿田彦や青面金剛を祀り、勤行をしたり宴会をしたりする習慣である。
庚申塔の石形や彫られる仏像、神像、文字などは様々ですが、申は干支で猿に例えられるから、「見ざる・言わざる・聞かざる」の三猿を彫り、村の名前や庚申講員の氏名を記したものが多い。

庚申の本尊は青面金剛とされているため、青面金剛が彫られる事もある。
神道では猿田彦神を彫られる事もある。また、庚申塔には街道筋に置かれ、塔に道標を彫ったものも多く、さらに塞神として建立されることもあり、村の境目に建立されている物もある。

参考資料

表の１

府中日吉神社関係年表

年　号	西暦	記　　事		資　料	備　考
天　武　元	６７３	創　建	天武天皇白鳳二発酉歳始建立云云	正徳棟札	
１５世紀末期～			現本殿再建	様式により推定	
１６世紀初期					
不　　明		解体修理	（長押打替、桁、棟木取替）	痕　跡	
延　宝　５	１６７７	屋根修理	山王大権現宮上葺	棟　札	
貞　享　４	１６７８		夷申講供養	棟　札	
宝　永　７	１７１０		日吉山王権現御輿造立	棟　札	
正　徳　４	１７１４	解体修理	山王大権現本社幣殿拝殿造立	棟札、墨書、銘札	
享　保　６	１７２１		山王大権現鳥居造立	棟　札	
同　　11	１７２６		大杉大明神新社造立	棟　札	
同　　12	１７２７		富士浅間小社造立、	棟　札	
			熊野大権現小社造立	棟　札	
寛　保　３	１７４３		日吉山王権現御輿造立	棟　札	
寛　延　３	１７５０		山王権現本社内宮造立	棟　札	
宝　暦　８	１７５８	屋根修理	日吉山王大権現鳥居造立	棟　札	
明　和　２	１７６５	屋根修理	日吉山王大権現本社屋根造立	棟　札	
寛　政　３	１７９１		山王大権現本社御輿拝殿修理	棟　札	
同　　３	１７９１		日吉山鐘楼堂修理	棟　札	
文　化　５	１８０８	部分修理	日吉山王大権現拝殿再建	棟　札	
同　　５	１８０８		（軒廻り垂木の一部差替え）	棟　札	
文　政　４	１８２１		天満天神社再建	棟　札	
天　保　11	１８４０		釣鐘堂再建立	棟　札	
嘉　永　４	１８５１		山王社敷石再興	棟　札	
同　　７	１８５４	屋根修理	山王大権現鳥居再建	棟　札	
文　久　２	１８６２		山王大権現本社屋根替	棟　札	
慶　応　元	１８６５	屋根修理	鳥居扁額奉納	銘　文	
大　正　11	１９２２		府中日吉神社本殿屋根銅板葺替え	棟　札	
昭　和　21	１９４６	部分修理	府中日吉神社鳥居改築幣殿修理	棟　札	
同　　35	１９６０		府中日吉神社本殿修理、	棟　札	
			子供御輿大鼓奉納	棟　札	
同　　61	１９８６	解体修理	本殿解体修理、幣殿拝殿修理、端垣、御輿倉、三社、手水舎新築		